

## 新型コロナウイルス感染症 —その特性と今後—

東邦大学看護学部 感染制御学  
小林 寅喆

2019年12月、中国湖北省武漢市で端を発したと考えられている新型コロナウイルス感染症はまたたく間に世界へと拡がりを見せ、3年が経過しようとしている。この間、世界の感染者数は6.2億人を死者は650万人を超え(2022年10月15日現在)、歴史に残る感染症となった。

新型コロナウイルス感染症は新興感染症であることから、人々に免疫がなく、また、特効的な治療薬がないため、インフルエンザに比べ高齢者や基礎疾患を有する罹患者に重症化する頻度と致死率が高くなる。当該ウイルスはヒト-ヒト感染を繰り返すことによって変異し続け、現在に至ってはパンデミック当初に比べ感染力は強くなってはいるものの病原性は低下し、致死率が低下しているのも事実である。また、いくつかのワクチンが開発され一般に応用されるようになり、先に述べたウイルスの病原性の低下とともに高齢者においても重症化する例は少なくなった。しかしながら、繰り返す変異ウイルスの出現により、現在においても、第6波を大幅に超える第7波の爆発的な感染拡大が、医療現場をはじめとし社会活動へ大きな影響をおよぼし、当該感染症への対応がいかに困難であったかを記憶に残る経験となった。

その一方で、過剰な対策や科学的根拠が乏しい対応により社会活動にも大きな弊害が生じたことも事実である。言わば、見えない恐怖のあまり日々発信される多くの情報に惑わされ混乱をきたしてきた。

このような感染症は多種の動物や微生物が共存している自然界で生活している限り避けられないことを認識し、今までの知見と経験を科学的に活かしていくことが我々人間に課された命題である。

本講演が、今までわかってきた新型コロナウイルス感染症の特性と、今後どのように対応していくかを考える機会となれば幸いである。